

# 5年目の「石巻」ボランティアから交流活動へ

## 「専大まつり」楽しむ

### 清掃活動やちゃんこ鍋昼食会も

#### 47人が活動

専大生の有志40人と教職員合わせて47人が宮城県石巻市を訪ね、ボランティア活動「東日本大震災夏期石巻交流活動」に奮闘した。震災が発生した2011年から毎年実施しており、今夏も8月5日から8日まで、石巻市内の小学生80人とベクトルボトルでろ過器を作ったり、ミニ運動会を開いたり楽しんだ。

当初、がれきの運搬や泥のかき出しから始まった活動は、現地のニーズに合わせて地域の清掃や子どもたちとの交流へと移行。5年目となる今回は、名称を昨年までの「復興支援ボランティア活動」から「交流活動」に改め、地域の人々との人間的な関係づくりを心掛けた。仮設団地で手作りの「ちゃんこ」を味わう昼食会では、住民と学生が熱心に話し込む姿もみられた。初参加は1年次生を中心に3割ほど。9月17日に神田キャンパスで開催された活動報告会では、「復興にはまだ時間がかかる」「活動を継続することが大事」など早くも次回に向けた思いが語られ、阿藤正道学生部長(商学教授)は「求められるニーズを模索しながら、石巻とのつながりを強めていきたい」と結んだ。



▲ 小学生と一緒にろ過器作り



▲ ミニ運動会を終え、笑顔で記念撮影



▲ 仮設団地で子どもたちと交流

「専大まつり」を開催。専大生有志40人と教職員合わせて47人が宮城県石巻市を訪ね、ボランティア活動「東日本大震災夏期石巻交流活動」に奮闘した。震災が発生した2011年から毎年実施しており、今夏も8月5日から8日まで、石巻市内の小学生80人とベクトルボトルでろ過器を作ったり、ミニ運動会を開いたり楽しんだ。

### 初参加者に聞く

#### 草むしりも喜んでくれる

白石洋子さん 法2



草むしりや子どもたちとふれあうことがボランティアになるのか、出発前は疑問に思っていました。今回初めて参加して、私はボランティアが堅苦しく考えていたのだと気づきました。

仮設住宅の周りに子ども遊び場はなく、空き家になった所はクモの巣が、こんなに喜んでもらえる人が「ありがとう」「助かるよ」と声を掛けてくれ、あめをくれる方までいました。さいな活動だと思っていました。被災地では肉体的作業が重要というイメージが印象に残っています。除草や荷物運びなどを使うことだけでなく、人の心をときほぐし、傍らに寄り添うことだけでも大切なだと実感しました。ボランティアで

えると感激しました。仮設住宅での食事で、住民の方から、来年はますます空き家が増えるので、家を建てて引越していく人、残らざるを得ない人。時間の経過につれ生活環境が変わる中で、私たちにできることは何だろう、被災した方が一番してほしいことは何だろうと考える

ていきたいと思っています。東日本大震災では、祖母や親戚が被災し、私も後片付けや泥出しの手伝いに行っていたので、被害の大きさは目に焼き付いています。身内に細かく聞いたことはなかったのですが、今回、避難所生活で困ったことや役立ったことをたくさん教わり、日ごろの備えや心掛けの大切さを学びました。

私は一人っ子で、子どもたちがうまく話せるか不安でしたが、「専大まつり」ではみんなが話しかけてくれて助けられました。笑顔があふれた専大まつり、やってよかったです。自分をもっと高めてボランティアに行きたいという気持ちが強くなりました。

#### うれしかった女の子の笑顔

許田紘平さん 文1



私が東京の中学3年生

だった2011年、東日本大震災が起き、祖母の住む岩手県陸前高田市は、津波による大きな被害を受けました。幸いなことに祖母は無事でしたが、いつか東北の被災地でボランティアをしよう

と決意しました。被災地では肉体的作業が重要というイメージが印象に残っています。除草や荷物運びなどを使うことだけでなく、人の心をときほぐし、傍らに寄り添うことだけでも大切なだと実感しました。ボランティアで

は、押し付けや自己満足はだめですね。自分がいと思ったことが果たして相手喜んでくれるかどうか分かりません。

今回のボランティアは、スタッフの方々が準備をしてくれておかげで存分に活動できましたが、私一人だったらどこまで一歩踏み込んでいきたいか分かりません。来

#### 地域活動に協力

8月29日、神田キャンパス近くで開かれた「子供縁日・子供コンサート」に、SKV(専修神田ボランティア)が協力して盛り上げた。

神田神保町三丁目町会(会長・塚谷卓二氏)が企画した催しで、毎年近隣の人々にぎわう。中でもSKVメンバー9人が出店補助をした「流しそめん」は大人気。子どもたちは夏休みの最後の週末を楽しんでいた。

SKV代表の寺澤さん(法2)は「外国人も立ち寄って楽しそうに活動にはこれからも協力

年もぜひ参加したいし、参加できなくてもチャンスがあれば自分から被災地に飛び込んでいきたいと思



▲ 盆踊りを盛り上げる西神田児童センター

#### SKV、「祭り」を盛り上げる

「若い学生の皆さん、参加はありますか」と「異世代ふれあい交流会」にもSKVが協力。同日、同じく神田キャンパス近くの西神田児童センターで開かれた「子供縁日・子供コンサート」に、SKV(専修神田ボランティア)が協力して盛り上げた。

下団体。学内の防災活動や神田キャンパス地域の清掃活動に尽力している。

#### 外国語の又又必 外国語教育研究室

— 41 — 英語

大久保 讓 文学部准教授

翻訳というのは、原文の意味を理解し、対応する別の言語に置き換えることである。文学作品を翻訳する場合も基本的には同じことなのだが、ときには意味を移し替えるだけではすまない場合もある。

フランスにウリポという作家グループがあり、実験的な作品を次々に生み出している。代表的な作家ジョルジュ・ペレックの最も有名な小説がLa Disparitionだ。この長編ではフランス語でもっとも頻りに使用される文字であるeがひとつも使われていない。特定の文字を使わないこうした技法をリプログラムという。この小説を他の言語に翻訳するとどうなるか。作家ギルバート・アデアが手がけた英訳版も、やはりeを用い



いで全編を通して。だが、これを日本語に翻訳する場合は厄介だ。アルファベットのeが存在しない。そこで日本語版『煙滅』の訳者・塩塚秀一郎は、「い段」の仮名(いきしちにひみりみ)と、それを含む熟語を使わずに日本語にする、という方法を選んだ。原文のリプログラムを日本語で再現することを選んだのだが、もちろんこれは、eを用いないというフランス語の原文「そのまま」ではない。果たしてこれは意識なのだろうか。むしろ「異訳」というべきではないか。いや、「い段」を用いていないのだから、「意識」でも「異訳」でもなく、単なる「訳」なのかもしれない。 ※短縮版。全文はCALL教室ホームページで。